

平成26年度成果報告書

I. 業務の内容

1. 業務の題目

課題研究「科学技術リスクの協働的なメディア議題構築に向けた実践的研究」

2. 担当フェロー

田中 幹人

3. 当該年度における成果

①科学とメディアを媒介する実践の場の社会実装の推進

科学とメディアを媒介する実践の「場」として一般社団法人サイエンス・メディア・センター(SMC)を活用し、その中での機能的・規範的検討を重ね、JST 科学コミュニケーションセンター(CSC)に移管すべき機能、SMCとして独立に持続可能に社会実装すべき機能を検討した。

a. Science Alert (SA)の発行と検討

SAとは、『科学技術の関わる社会問題のトピックに関し、ジャーナリストに専門家の知見を素早く伝えること』、また『科学の興味深いトピック、新規技術の可能性や社会的意義などについて、第三者の知見を提供すること』を目的とし、SMCがジャーナリスト向けに発行する「科学技術の専門家コメント」で、SMCによるSA発行は2010年10月から行っている。今年度は、目標の20本の3倍を超える66本を発行した。

本ユニットでは今年度、SAを通じたコミュニケーション行為を指向し、JST RISTEX 成果統合型プロジェクト「科学技術 이슈の議題構築に向けた媒介機能の実装」(実装代表者:田中幹人、2013年)による支援において試作した媒介行動規範の再検討に向けて素地を整えた。

具体的には、SA発行フローにおいて発生した課題を挙げ(図1参照)、これを媒介行動規範と照らし合わせた(図2参照)。これにより、挙げられた課題は、規範要素における重要度が高く、この解決にはアドバイスおよび提案が行える科学諮問機関が有効であると考察した。

b. Horizon Scanning (HS)の発行と検討

HSとは、『各大学、研究機関、ジャーナルから得た新規の科学ニュースを知らせる』ことを目的とし、SMCが登録ジャーナリスト向けに配信するメールマガジン」で、SMCによるHS配信は2012年4月から行っている。今年度は、週1回のペースで36本発行した。

本ユニットでは今年度、科学技術の成果情報の集約とキュレーションの仕組みの開発・改善のプロセスを含めてレビューを行い、PDCAサイクルを踏まえて最適化した。

最適化の主な内容：

スタッフ運用の効率化／

媒体や研究機関毎に担当を分けていたものを週替わりの担当制にし、1週間に来る全ての研究情報を処理する方式に変更。加えて定例ミーティングで相互確認を行った。

報道解禁前の研究情報を重視／

主な収集対象の中でも特に学術出版社からのリリースに重点をおく

情報収集範囲の拡大／

The Australian Science Media Centre、Science Media Centre (New Zealand)との情報共有利便性の向上／配信メール文面に論文へのリンクを追加

SAへの連結／HS担当者から、SAになりうる研究成果の提案を奨励

②メディア・トレーニング・プログラム2 (MTP2) の開発

研究者とジャーナリストというステークホルダーのコミュニケーションを通じ、協働的な相互作用による専門知の再フレーミングが求められている。研究者のメディア対応能力向上のためにSMCが開発したMTPにおいて、メディアに向けて「科学を語る」営みによって積層されてきた知(「プロセスの知」)や、科学側だけでなくメディアにおいて科学を語る際のTipsに繋がりを研究群(社会心理学、マスコミ論、ジャーナリズム論、STSなど)を体系化することはもちろん、これを検証可能なかたちで提示することによって、システム(＝カリキュラムおよびテキスト)に対する信頼を獲得することを目指した。また、国内外で行われている「専門家の社会に向けた語り」(特に科コミ・リスコミ)の事例調査を行い、システムに反映させた。さらに、この成果を用いたMTP2を3回試行した。

カリキュラム構成：

- レクチャー① なぜ専門家がメディアを意識しなくてはならないのか
- レクチャー② オーディエンスを理解する
- レクチャー③ ジャーナリストを理解する
- レクチャー④ リスク対応
- ワークショップ① 伝えたい事を整理する
- ワークショップ② 読み手を意識して書く
- ワークショップ③ 相互インタビュー
- ワークショップ④ 相互インタビュー(炎上時)
- ワークショップ⑤ テレビ取材

試行したMTP2の概要：

【カリキュラム】レクチャー①、②、③、および、ワークショップ①、②

【対象】大学院生

【講師】田中フェロー、科学コミュニケーター 内田 麻理香

【日時】2014年10月25日、11月1日

【会場】大阪大学吹田キャンパス

【参加者数】5名

【カリキュラム】レクチャー①、②、③、および、ワークショップ①、②、③

【対象】大学生

【講師】田中フェロー、(社)サイエンス・メディア・センター スタッフ

【日時】2014年10月28日

【会場】奈良先端科学技術大学院大学

【参加者数】20名

【カリキュラム】レクチャー①、②、③、および、ワークショップ④、⑤

【対象】農業・食品産業技術総合研究機構の専門家、および、広報担当者

【講師】田中フェロー、(社)サイエンス・メディア・センター スタッフ

【日時】2014年11月26日

【会場】日本科学未来館

【参加者数】30名

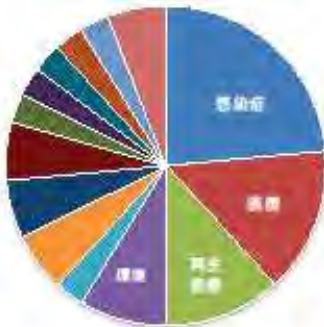
Science Alert の編集過程

- ✓ 時宜性はあるか
- ✓ 潜在的な被害者が想定されるか
- ✓ 将来的に問題化が予想されるか
- ✓ 複数の専門家からのコメントがあるか
- ✓ SA全体のバランスが取れているか
- ✓ コメントに信頼性はあるか
- ✓ コメントの長さは適切か(400-800字)

・10人~20人に対してコメント依頼



・週1回の定例会議でトピック決定



- ✓ 関連する論文を出しているか
- ✓ 周辺分野も視野に入れているか
- ✓ 少数意見をもつ専門家は入っているか

◆SAを作る上での悩み

- コメントが長い
2000字+のエッセイをいただくことが多い
- 難しい言い回しやジャーゴンが多い
- 電話取材よりも文章でのコメントを好む
- 断られることが多い
- 他の専門家を推薦・若干専門が異なる・多忙

Science Alert 編集上の問題点

取り上げるべき 이슈を見逃しているのではないか

- ✓ すでに事件化しているトピックや論文に対するコメントが中心
- ✓ 専門家からの情報提供が現状ほぼ無い
- ✓ 国内では巨大な研究機関以外からの情報を受け取っていない

コメントすべき専門家をカバーできているのだろうか

- ✓ カバーすべき範囲とスタッフそれぞれの専門性との差
- ✓ コメントを依頼した際に断る専門家の多さ
- ✓ 各分野内の「見取り図」の不足

ジャーナリストのニーズを満たしていないのではないか

- ✓ 情報解禁日前にコメントを提供している割合
- ✓ ジャーナリストが「欲しい」情報とのギャップ

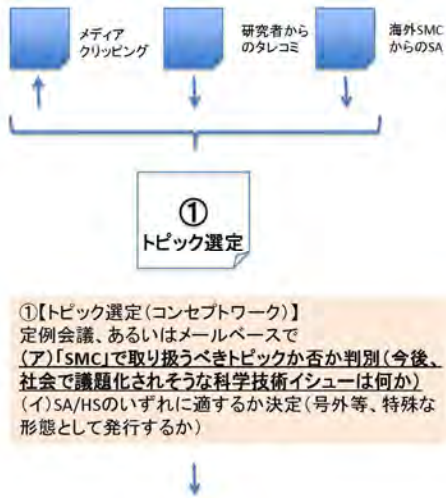
これら諸問題の解決に諮問機関が有効

図 1 Science Alert の編集過程における編集上の問題点と課題

(出典：JST 科学コミュニケーションセンター 調査・研究成果報告会 (2015年2月4日) 田中ユニット発表資料)

問題点①「取り上げるべき 이슈を見逃しているのではないか」

問題が発生したフロー：①「トピックス選定」

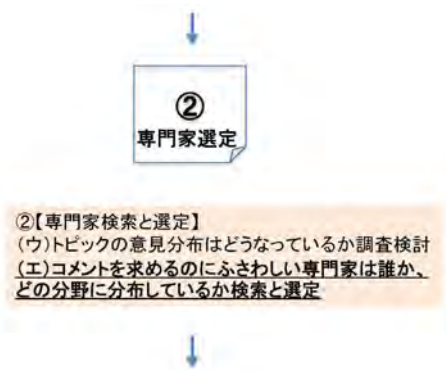


■左図(ア) で要される媒介行動規範要素

		媒介行動規範要素
信頼性	品質	社会的公平性 議論の質
	包括性	幅広い課題の考慮
先見性	先見性	将来に対する想像力
政策志向性	時宜性	社会的なニュースへの対応力

問題点②「コメントすべき専門家をカバーできているのだろうか」

問題が発生したフロー：②「専門家の選定」



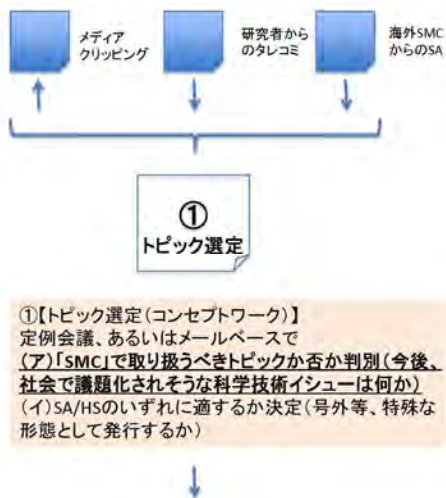
■左図(エ) で要される媒介行動規範要素

		媒介行動規範要素
信頼性	品質	科学的信頼性
	包括性	複数の視点の考慮

※「品質」の「学際性」「プロセスの透明性・公平性」も要されるのではないかと。

問題点③「ジャーナリストのニーズを満たしていないのではないか」

問題が発生したフロー：①「トピックス選定」



■左図(ア) で要される媒介行動規範要素

		媒介行動規範要素
信頼性	品質	社会的公平性 議論の質
	包括性	幅広い課題の考慮
先見性	先見性	将来に対する想像力
政策志向性	時宜性	社会的なニュースへの対応力

※解禁前の情報提供については、「コミュニケーション能力」の「メディア対応力」、「適正規模」の「即応性」も要されるのではないかと。

図 2 明らかになった課題と問題の発生したフロー、媒介行動規範との対応について